ルリユール

Reliure

村山早紀著 ポプラ文庫ピュアフル 2016

秋も深まってきましたね、秋といえば読書の秋！さて、みなさんは「ルリユール」ということばをきいたことがありますか？ルリユールというのは、ヨーロッパの伝統的な手作りによる製本の技術で、ヨーロッパでは、本が壊れたり、古くなったりするとそれを修理してくれる「ルリユール」というおしごとがむかしから存在します。絵本でも、そんなルリユールのおしごとをスケッチして描いた「ルリユールおじさん」が有名ですね。ルリユールという言葉をはじめて聞いたのは、わたしは実は大学のころでした。なんでも普段つかうものがこわれたり、おかしくなったりすると直すところがある、本にもそういう場所があって、それを直すことができる人がいる、と知ったときは、とてもすてきなお仕事だなと感動し、とても興味がわきました。大切な本や思い入れの深い本はいつまでも自分の手元においておきたいですもんね。今月紹介するのは、そんなルリユールの、ちょっと不思議なおはなし。

舞台は、風早という町のほおずき通り。主人公の中学生、瑠璃は残暑がまだ残る夏の少しの間、定食屋を営む祖母が暮らすこのほおずき通りで過ごすことになる。図書館司書をする母、アルバイトが忙しい姉より一足先にほおずき通りに着いた瑠璃だったが、祖母がけがで入院してしまったことを知る。母と姉が、来るまで瑠璃はほおづき通りの祖母の家で一人で過ごすことに。この風早のほおづき通りには、昔から古い洋館があって、そこには、魔法のように本を修理することのできる魔女のような女の人がいるという噂があることを耳にする。普段から司書をする母の本の修理を手伝っている瑠璃は、その洋館、その女の人のことが気になる。ある日、瑠璃は、その洋館を訪れ、その洋館で女の人と会う夢を見る、とても不思議な夢。その翌日、夢の通りの場所に行ってみると、本当にその洋館があった。そしてその洋館の中には、赤毛の女の人クラウディアがいた。瑠璃はクラウディアのもとで、弟子としてお手伝いをすることになるが…というおはなし。

クラウディアがいる洋館、『ルリユール黒猫工房』には、クラウディアの噂を耳にした、いろんなお客さんがやってきます。みんなそれぞれ大切な本を持って。クラウディアさんはまず、依頼の本についてお客さんにはなしを聞きます。お客さんの大切な本、その本を修理してほしい理由に涙があふれます。本は、読むごとに開くごとに、自分の本へとなっていきます。世界に一つだけしかない一冊、替えのできない一冊なんだよなぁとお客さんの本の話を聞いていると胸をうたれます。冒頭で、ちょっと不思議な「ルリユール」のおはなしと書きましたが、それは、クラウディアさんがそのお客さんの本を修理するまさに「ルリユール」の作業、たったひとりで、あっという間に、魔法のように本を修理してしまう・・・クラウディアさんは本当に魔法使いなのか？この本をよめばわかります。後半に描かれるクラウディアさんの秘密、そして瑠璃のかかえる秘密にも涙があふれますよ。魔法のように、本を修理するクラウディアさんが『ルリユール』について話している言葉がとてもすてきなので、最後に紹介します。

「このクラウディアはこの世のすべての本を愛するひとと愛されている本の味方です。」
「本というものは、人間に似ているのよね。こんなに未来の、科学の力で人間が月へも行く時代になったのに、いまだにこんなに柔らかいものでできていて、水や衝撃に弱く、傷つけば壊れてしまい―死んでしまう。永遠に生きることはできない存在のまま…」
「ルリユールの技は、儚い命しか持たないはずの本を、読み手と共に生きていけるように作り直すための技術。そして未来の、そこに待つかもしれない新しい読み手のもとに届けるための技術なの。本の命を延ばすために、できるだけのことはしてあげないとね。」

ルリユールの修繕の技術はもちろん大切で素晴らしいですが、本に対する愛情や思いがあってこそなんだなぁと。ただ修理するだけじゃないんだよなぁと。だからこそ、お客さんのお話を最初に聞くことは大事で、大切で、もうここから本の修理ははじまっているんです。この本を読んでわたしは以前よりもっとルリユールのお仕事に興味がわきました、もっと好きになりました。あぁ、わたしもクラウディアさんに弟子入りしたい…！読み終わったら自分が小さいころから大事にしている本をぎゅっとだしめたくなります。大好きなルリユールの本を最後の司書の部屋の本として紹介できてよかったです。4年間と半年とすこしみなさんありがとうございました。